

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

令和7年12月
妙福寺保育園 すみれ組（3歳）

1. 活動のテーマ 「枝」

- ・冬の自然物に触れ、季節感を感じる
- ・集めたものを使った遊びや制作につなげる

枝は園庭や散歩先で日常的に目にする身近な自然物であり、3歳児にとって自分から手に取りやすい素材であることから活動のテーマとして設定した。

普段の遊びの中で、枝を使ってままごとをしたり地面に絵を描いたりする姿が見られ、冬になり木々から落ちた枝が増えていく中で、子どもたちの遊びの幅や創造力がさらに広がっていくと感じた。そこで、ただ落ちている枝として捉えるのではなく、一つの自然物に着目し他の冬の木の实などもおりませながら、実際に触れて関わる経験を大切にしたいと考えた。

2. 活動スケジュール

令和7年11月から令和7年12月

- ①木の感触を感じる ②木(枝)の皮むき ③枝をさしてみる ④枝倒し ⑤枝探し
⑥枝を切る ⑦枝と粘土を組み合わせて生き物を作る ⑧ままごと ⑨枯れ枝で楽器

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材】

枝、木の实(どんぐり・松ぼっくり・南天・マンリョウ・椿の实)、葉っぱ、小石、紙粘土、段ボール、発泡スチロール

【道具】

仕分け用の空き箱、収穫用の小さなかごや袋、枝切ばさみ

【環境設定】

活動の環境設定としては、子どもたちが枝や冬の自然物に興味を持てるよう、保育者が日常的に「枝」という言葉を意識して使った。園の敷地内にある林で活動することで、色々な太さや感触の枝に気づけるよう配慮した。また、枝に加えて木の实や枯れ葉などの冬の自然物を組み合わせることで、子ども一人ひとりが自分の表現で自由に制作できるよう、自然物を集めたり仕分けしたりする環境を整えた。さらに、枝を使ったままごと遊びが楽しめるよう、ままごとの近くに枝を置き、自由に手に取れるようにした。紙粘土を用いた動物作りでは、個々の自由な表現のために、集めて仕分けした木の实を木の周りにバイキングのように置き、子どもが好きなものを手に取れる環境にした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

子どもたちは園庭や隣接する林で、冬の枝や木の実、枯れ葉などの自然物に触れながら遊びを展開した。木の幹や枝の感触を確かめたり、枝の皮をむいたりさして倒してみるなど、手で触れる感覚を楽しんだ。枝を使った制作では、紙粘土と組み合わせて動物や餃子、マッシュマロなど日常のものに見立てて作る活動を行った。また、枝を使ったままごとや焼き芋ごっこ、丸太を叩く楽器遊び、トンネル遊びなど、子どもが自由に遊び方を考えて展開できる活動を実施した。さらに、保育者が枝切りばさみで枝を切る姿を見せることで、子ども自身も安全に枝を切る体験を行い、道具の使い方を学ぶ機会も設けた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

活動中、子どもたちは園庭や隣接する林で枝や冬の自然物に触れながら遊びを楽しんだ。木の幹や枝の感触に触れると、「ゴツゴツしてる」「強い」など手触りの感想を言いながら、友達と「あの木はどんなかな?」と一緒に確かめに行く姿が見られた。保育者が日常的に「枝」という言葉を使うことで、子どもたちは枝を見つけると「先生、枝欲しいでしょ」と保育者に渡す行動も増え、枝に対する関心を他者との関わりの中で示す姿があった。林では、細く小さい枝を集める子や、太く大きい枝を選ぶ子など、それぞれが自由に枝を探す姿が見られた。前日に行った身体測定を思い出して枝を使って友達同士の身長を測ったり、園での焼き芋作りの経験をもとに枝で「火を起こす」ままごとをしたり、葉っぱを焼き芋に見立てて会話をしながら遊ぶ姿もあった。丸太を枝で叩き楽器のように音を楽しむ子や、友達と一緒に演奏する姿、また太い枝を手で折ることに挑戦し、折れる音や感触を楽しむ子の姿も見られた。折るのが難しい枝では、自分の体を使って折る工夫をする様子があり、友達もそれを真似して同じ遊びを広げていた。さらに、カーブした枝を使ってトンネルのように交代で遊ぶ姿もあった。保育者が枝を枝切りばさみで切る姿に興味を持った子どもたちは、自分でも切りたいと集まり、援助を受けながら挑戦した。太い枝は切りにくいことに気づき、自然と細い枝を選んで切るなど、道具の使い方や特性に気づく学びもあった。紙粘土を用いた制作では、枝を餃子やマッシュマロに見立てるなど日常のものに見立てて作る姿があり、友達と「美味しそう」「どうやってやるの?」と互いの作品を認め合いながら真似して遊ぶ姿も見られた。









5. 振り返り

子どもたちは「枝」という身近な自然物を通して、冬の自然や素材の多様な特徴に気づくことができた。園庭や林で枝の感触を確かめたり、倒したり折ったりする中で、手で触れる楽しさだけでなく、枝の太さや硬さの違いを感じ、道具や力加減を工夫する経験につながった。枝を使った制作やままごと、焼き芋ごっこ、楽器遊びでは、子どもたちが自分の発想で遊び方を広げ、友達とやり取りしながら遊ぶ中で、協調性や想像力が育まれる様子が見られた。

また、保育者が枝切りばさみや「枝」という言葉を意識的に使うことで、子どもたちは自然物への関心を深め、自分から選び関わる姿が生まれた。枝を集めるだけでなく、誰に渡すか、どの枝をどう使うかといった視点も育ち、遊びを通して社会性や思考力も発展していた。紙粘土で枝を日常のものに見立てる制作では、子ども一人ひとりが自由な表現を試み、友達の作品に興味を持ち、真似したり工夫したりする姿も多く見られた。

枝という単純な素材でも、子どもたちの感覚・創造力・協働性・主体性が豊かに育つことを改めて実感した。